

令和3年度 入学者選抜試験問題

国 語

〔100点〕
〔50分〕

実施日：令和3年1月7日（木）

※ 下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示があるまで開かないこと。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 試験時間は10：20～11：10の50分であり、途中退室は認めない。
2. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開かない。
3. 解答用紙には、解答欄のほかに、受験番号、氏名の記入欄があるので、下記を参照し記入・マークすること。
 - 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークすること。
 - 氏名欄 氏名・フリガナを記入すること。
4. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせること。

— 開始後 —

1. この問題冊子は21ページである。確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせること。
2. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行うこと。
例えば

40

 と表示のある問いに対して ③ と解答する場合は、次の(例)のように解答番号40の解答欄の③にマークする。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
	1	2	3	4	5
40	①	②	●	④	⑤

3. マークはHBの鉛筆で行い、所定欄以外にはマークしたり、記入したりしないこと。
4. 解答用紙は汚したり折り曲げたりしないように特に注意すること。
5. 訂正は、消しゴムであとが残らないように完全に消し、かすが残らないようにすること。
6. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせること。ただし、問題に関する質問は受け付けない。

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えよ。

しばらく二元論に従って考えてみよう。そして、どういふ点で*大森がそれを批判するのを見ることが出来る。

「内界」という言葉は大森が用いる言葉ではないが、私としては、二元論が考える「心」を捉えるには「内界」という言葉を使いたい。内界に対比して言うならば、物理的世界は外の世界、「外界」である。われわれはみな、この一つの世界——外界——の中に生きている。そう二元論は言うだろう。そしてこう続ける。この外界のものは、各人各様の心の世界——内界——に取り込まれる。例えば、道に一匹の黒犬がいる。それは見る人の立つ位置によってさまざまに見える（向こうからは犬の鼻面が見えるが、こちらからはお尻が見える）し、また、その人の過去の経験や性格等のある方によっても異なって見える（かわいいと言う人もいれば、こわいと言う人もいるだろう）。つまり、その黒犬は十人十色にそれぞれの内界（心）に姿を映るのである。かくして、一つの世界の中に、心をもつものたちの数の分だけ内界があり、そこに外界の影がそれぞれに映し出されているという描像が得られる。これが、物心二元論、あるいは心身二元論である。

（a）、私は私の内界に住むしかない。私が見ている風景は私の内界に映じた外界の影であり、私を感じている痛みや悲しみも、あるいは私のさまざまな思いも、すべて私の心の内、私の内界のできごとである。そのとき、二元論者もまた、いや二元論者であるからこそ、二種類の超越に悩まされることになる。一つは外界であり、もう一つは他人の内界、すなわち他人の心である。

まず物心二元論と外界の問題を考えよう。

二元論が考える外界はどのようなものになるのだろうか。というのも、それは例えば色をもちえないように思われるからである。私にはそこに黒犬を見ている。しかしそれは私の内界に映し出された姿にほかならない。では外界においてその犬は何色なのか。黒犬はやはり外界でも黒いのだろうか。いや、「黒」という色は私がそれを知覚するかぎりにおいて現れるものである。視覚器官が私とずいぶん異なる生物であれば、その生物にとっては、見えてくる色も私と違うものになるだろう。色は、それぞれの内界に応じた性質であり、われわれが生きているただ一つの外界の性質ではありえない。だとすれば、外界にいる物理的対象としての犬は、色をもたないという

ことになる。

同様に、その犬は「ワン」と鳴くこともない。鳴く動作はするのかもしれないが、音はしない。音を聞くというのは知覚以外の何もでもないからである。頭をなでても何の手触りもなく、鼻を近づけても何の臭いもしない。(b)、味もしない。) 外界と内界が裁断されることにより、外界に属するものたちからは (I) 性質のいっさいが剥ぎとられることになるのである。

ここに、原子論が登場する必然性がある。それは必ずしも現代の素粒子論でなくともよい。古代のより粗雑な原子論でもかまわない。ともかく、われわれが知覚している色や音や臭いなどは、原子の配置や運動が原因で生じるものとされる。それゆえ、原子そのものには色はない。叩けば音がするというわけではなく、嗅いでも臭くはない。原子論的に描写された物理的世界は、まさしく色も音も臭いもない世界なのである。

だが、原子といえども、まったく何の性質も持たないわけにはいかない。まさにいま「色や音などは原子の配置や運動が原因で生じる」と述べたように、原子もまたある位置を占め、なんらかの運動をする。この点こそ、大森が二元論を攻撃するポイントとなる。原子はどこにあるのか。大森は二元論者に対してそう問いかける。相手が答えられないのを見透かした上で。

例えば、机の上にティーカップがある。では、それを構成する原子はどこにあるのか。ふつうに答えるならば、もちろん答えは「そこ」というものだろう。ティーカップは原子からできている。ならば、その原子はティーカップのある「そこ」にある。しかし、二元論者はそのように答えることができない。

X

。そして問題になっっているのはその知覚像を生み出している原因となる原子たちである。二元論的な描像に従うならば、見えているこのティーカップは私の内界に映し出された知覚像にはかならない。たとえて言えば、見えているティーカップはテレビ画面に映っている映像であり、この映像はどこを映したもののなかと尋ねられて、「そこ」と言つてその画面上の一点を指差したようなものである。テレビ画面に映っている光景(例えば南の島)は、テレビ画面のある「そこ」(例えば我が家の居間)ではないどこかを映している。では、それはどこか。原子はどこにあるのか。

答えようがない。それはたんに不可知だというのではない。そもそも内界と外界との位置関係を問うことが無意味なのである。空間的位置を私が知覚しているものたちをもとにして了解している。いわば、私が理解している空間的位置とは、私の内界の中における位置なのである。(c)、この内界を生み出す原因となる外界はどこにあるのかと問われても、私の内界と外界との位置関係な

ど、意味不明でしかない。

同じことを別の角度から述べてみよう。物理的対象であるティーカップから光が反射し、物理的な眼に入り、物理的な脳を興奮させる。そしてその結果、私にティーカップの知覚像が現われる。では、その知覚像を生み出す原因となった私の脳はどこにあるのか。私は「ここ」と言つて私の頭を指さすだろう。だが、二元論者にはそれができない。私が指差したその頭は、知覚の世界の頭である。叩けば音がして多少痛くもあり、鏡をのぞけば見ることもできる、頭の知覚像にはかならない。その頭を開けば脳があるだろうが、それもまた知覚された脳でしかない。問題になつてゐるのはそれらの知覚像を生み出した脳興奮が生じてゐる物理的脳のありかである。極端なことを言えば、私の物理的な脳はどこかのイカレタ科学者の実験室の中にあり、そこでいろいろ操作をされてこんな知覚風景が現われてゐるのかもしれない。《1》

たとえて言うならば、私が夢の中で野道を行くとき、それを夢見ている私は野道とは無縁のベッドの上にいる、そんな感じである。夢の中の私が夢の中でゐる場所と、私がそれを夢見ている場所は、まったく空間的關係をもたない。(d)、夢の中の野道はベッドの北にあるのでも南にあるのでもない。同様に、私の物理的脳とこの知覚風景とは、二元論に従えば、まったく空間的關係をもたないものとなる。《2》

注意してほしいのだが、これは二元論に従うならばこういうおかしいことになつてしまふという、背理法的議論にはかならない。われわれは、もちろん、ティーカップを構成する原子は見えてゐるティーカップのところであり、私の物理的脳は叩けば音がして鏡にも映るこの頭の中にあると考えてゐる。だが、それはわれわれが二元論者ではないからにかならない。知覚像のあるところに原子もあるということとは、知覚像と物理的対象が二元論が考えるほどよそよそしいものではないということの意味してゐるのである。

同様のことは(II) 關係についても言われる。例えば犬が私に吠えたとしよう。さて、それは私が目で見て耳で聞いたできごとであるが、その知覚の原因となつた物理的できごとはいつ起こつたのだろうか。吠え声が私の耳に届くにはほんのわずかであれ時間がかかるため、実際に犬が吠えたのは、私が吠え声を聞く少し前ということになるだろう。光が届くのはもっと少しの時間であるが、ゼ口ではないから、やはり私が見たほんの少し前に、実際に犬が吠えたということになる。さらに耳から脳へ、あるいは目から脳へと刺激が伝達され、それにも時間がかかる。それゆゑ、総じてある知覚を引き起こした物理的できごとは、その知覚の時間よりも少し過去

のことになる。しかし、自然科学が算出する時間は、音が耳に到達する時間、光が目には到達する時間、そして刺激が脳に到達する時間までである。そのあと、脳興奮が知覚を引き起こすのにどのぐらい時間がかかるかについては、自然科学は何ひとつ述べていない。そもそも脳興奮と何かが見えたり聞こえたりすることの間の関係は、自然科学が捉えうるようななんらかの物理的因果経路が想定されるようなものではない。脳が興奮するとなぜか何かが見え、脳が興奮するとなぜか何か聞こえるのである。それゆえ、脳が興奮してから百年たつてようやくそれに対応する知覚が生じると考えても、それによってわれわれの知覚体験はもちろん、自然科学も何の影響も受けない。《3》

どこかの実験室にある脳がいま私にこの知覚風景を見させていると考えることができるように、百年前の脳興奮が、いまのこの知覚風景を見させているかもしれないのである。もちろんそれは千年前だろうと一万年前だろうとかまわれない。つまりは、より正確に言えば、物理的な脳興奮とそれによって生じた知覚像とはまったく時間的關係をもたないのである。それゆえ、犬が吠えたという物理的できごととその知覚像の間にも、いっさいの時間的關係はないということになる。

かくして、二元論に従えば、(Ⅲ) なるものと知覚像の間には時間・空間的關係がないことになる。しかも、われわれは知覚されているものごとに対して時間・空間的位置を測るしかない。方向を見定めるのも、距離を測るのも、目で見、足で歩いたこの土地についてのことであり、あるいは、目で見た太陽で一日を測り、目で見た時計の針の動きで時間を測るのである。それゆえ、二元論の考え方をつきつめれば、原子に対して、色や臭いはもちろん、その時間 空間的位置さえも、言えなくなってしまうのである。

原子を持ち出してきたのはよいが、その原子のあり方について、二元論は何ひとつ言うべき言葉をもたない。《4》

二元論のもうひとつの側面、心身二元論は、他人の心という問題に直面する。心身二元論は、心と身体がそれぞれ独立の存在であると考えられる。ちょうど、箱と箱の中身は独立で、ふつうはケーキの箱に饅頭が入っていることはないが、別にケーキの箱に饅頭が入っていてもよいし、漬物が入っていてもかまわない。箱は箱、中身は中身、別物である。同様に、心身二元論は心を身体に納められた、あるいは身体に宿った、何ものかであると考えられる。それゆえ、腹痛を装い仮病を使ったり、いかにも悲しげな顔の裏でほくそ笑んでいたりすることがありうるように、身体に現われた様子と実際の心のありようとは別物だと考えるのである。だが、そのとき、私は他人の身体の内には宿っているとされるその人の心を、どうやって捉えればよいのだろうか。私が他人に関して観察できるのはその人のおかれ

た状況とその人の身体だけでしかない。

これに対して心身二元論は、「類推説」と呼ばれる考え方を持ち出し出てくるかもしれない。つまり、こうである。私は自分の身体と心をとともに観察することができるとして、私が腹を押さえて呻うないているときには、私の腹に痛みいたみの感覚が生じていることを知っている。そこで、このことから他人の場合を類推するのである。他人の場合にはその人の外見、すなわち腹を押さえて呻うないていることしか分からない。しかし、私の場合から類推して、その人の腹にも痛みいたみの感覚が生じているだろうと考える。これが、類推説と呼ばれる考え方である。

(e) 日常的にはこのような仕方では他人の心を推し測ることもしているかもしれない。だが、これは他我問題という哲学問題に答えるには無力と言わざるをえない。第一に、類推説は、私の場合の心と身体からだの関係と他人の場合の心と身体からだの関係が同様のものであることを前提にしている。たしかに、私の場合には腹を押さえて呻うないていることと痛みいたみの感覚は連動している。しかし、他人の場合にもそのような連動が起こっているだろうことを、私はどうやって知るのか。類推説はその点をまさに前提にして、私がこうだから他人もこうに違ちがいと決めつけているにすぎない。

第二に、他我認識の懐疑はさらに進んで、そもそも他人に心があることはどうすれば分かるのかと問いかける。そして類推説はこのいつそう過激な問いには何も答えることができない。目の前の他人は外見上私と同じようなふるまいをしている。しかし、それが心をもったふるまいであるのか、心をもたぬたんなる木偶でこの坊の動きにすぎないのか、どうすれば分かるのか。この根本的な問いに対しては、もはや「類推によって」と答えることはできない。

さらに第三に、大森には類推説に満足できないもつと根本的な理由があった。大森が他我問題に見出したより深い次元は、他我の意味の問題であった。彼女が腹を押さえて呻うないているとする。そのとき、類推説に従えば、私の場合から類推して、彼女の腹にも痛みいたみの感覚が生じているだろうと私は判断する。しかし、「彼女の腹にも痛みいたみが生じている」ということの意味が分からないというのが、大森の異議申し立てである。私は私が腹を押さえて呻うないているとき、私の腹にこの感覚が生じていることを知っている。では、その感覚が彼女の腹に生じているというのだろうか。いや、すでに論じたように、それでは彼女の腹に私が痛みいたみを感じているということになっ

てしまう。《5》

知覚像語という観点から述べてみよう。「私は腹が痛い」は知覚像語にほかならない。だが、「彼女は腹が痛い」は私が知覚できることではなく、知覚像語ではない。それゆえ、「私は腹が痛い」の「痛い」と「彼女は腹が痛い」の「痛い」は意味が違うのである。「私は腹が痛い」の意味はダイレクトに私の感じる痛みによって意味づけられる。しかし、「彼女は腹が痛い」を私の感じる痛みによって意味づけることはできない。(何度も言うが、それでは彼女の腹に私が痛みを感じていることになる。)だから、大森に言わせれば、類推説が自分の場合をもとにして「彼女は腹に痛みを感じている」と類推するのだと主張するとき、そこで類推されていることの意味が分からないということこそが、他我問題の真の問題なのであり、類推説はその他我の意味の問題に対して、何ひとつ答えようとしていないのである。

《注》大森：大森荘蔵―日本の哲学者

(野矢茂樹『大森荘蔵―哲学の見本』より)

問1 本文中の（ a ） ～ （ e ） に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は（ a ） 、（ b ） 、（ c ） 、（ d ） 、（ e ）

- ① もちろん ② しかし ③ なるほど ④ つまり ⑤ それゆえ

問2 本文中の（ I ） ～ （ III ） に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は（ I ） 、（ II ） 、（ III ）

- | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| I | ① 知覚的 | ② 物理的 | ③ 具体的 | ④ 表面的 | ⑤ 絶対的 |
| II | ① 二元的 | ② 形式的 | ③ 時間的 | ④ 空間的 | ⑤ 相対的 |
| III | ① 抽象的 | ② 絶対的 | ③ 形式的 | ④ 物理的 | ⑤ 象徴的 |

- 問3 次の一文は、本文の《1》～《5》のいずれかから抜き出したものである。文が入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 9

物理的対象と知覚像の二元論は、こうして自滅するしかない。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問4 空欄

X

に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 10

- ① 「そこ」と言っ指差したのはティーカップの知覚像である
② 「そこ」と言っ指差したのは原子からなるティーカップである
③ 「そこ」と言っ指差したのはティーカップの知覚像を生み出している原因である
④ 「そこ」と言っ指差したのは、原子の配置や運動に過ぎない
⑤ 「そこ」と言っ指差しただけでは、二元論者は満足できないのである

問5 傍線部A「そもそも内界と外界との位置関係を問うことが無意味なのである」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 11

- ① 二元論的な描像には一定の限界が存在するから
- ② どこに原子があるのかを内界における位置関係から知ることができないから
- ③ 外界におけるものの本性は我々の認識を超えるものだから
- ④ 外界におけるものの位置関係を内界から知ることができないから
- ⑤ 当の位置関係自体が内界に属するものだから

問6 傍線部B「これ」は具体的にどのようなことを指しているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 12

- ① 物理的脳の興奮によつては、私の知覚風景を説明することができないこと。
- ② 私の知覚像と物理的脳の両者には何の空間的關係もないという結論が出てくること。
- ③ 夢の中にいる場所と夢見ている場所とは、異なる場所であるということ。
- ④ 知覚像の原因となる脳の状態を特定するには、十分な注意が必要なこと。
- ⑤ もしかするとどこかの科学者が自分の脳を操作しているのではないかと推測すること。

問7 傍線部C「類推説と呼ばれる考え方」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 13

- ① 他人の心がわからないのなら、自分の心も類推によるしかないとする考え。
- ② 感情移入によつて、他人の振る舞いに共感することを目指す考え。
- ③ 他人の心のあり方を、自分の心のあり方を拡張することで推し測ろうとする考え。
- ④ 自分の身体を観察することで、他人の感覚を類推しようとする考え。
- ⑤ 自分の心と身体との関係から、他人の身体と心との関係を類推する考え。

問8 傍線部D「他我問題の真の問題」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 14

- ① 他人の振る舞いから痛みの存在を類推しても、単なる決めつけにしかならないという問題。
- ② 自分だけに痛みがあり、他人は痛みふりをしているだけという疑問がぬぐえないという問題。
- ③ 自分の痛みの意味から他人のそれを類推すると言っても、何を類推するのが不明だという問題。
- ④ 自分の心と身体の連動を、他人にあてはめて類推しても、単なる推測の域を出ないという問題。
- ⑤ 我々は日常的にのみ他人の心を類推で推し測るだけで、科学的な根拠に乏しいという問題。

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 15

- ① 外界と内界の二元論を克服するためには、外界のものごとを各人各様の心の世界に取り込む必要がある。
- ② 二元論によれば、色は外界の性質ではありえないので、外界の物理的対象は色を持たないことになる。
- ③ 脳の興奮と知覚体験との関係は物理的因果関係によるものではないので、自然科学が対象とすべき領域ではない。
- ④ 物理的な脳興奮と知覚像の間には時間的關係はないので、われわれは類推によってそうした關係をとらえるしかない。
- ⑤ 自然科学が産出する時間は刺激が脳に到達する時間であり、その人個人に特有の時間感覺を計ることはできない。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えよ。

ファッションにぜんぜん気がいかないひとはかつこよくないが、ファッション、ファッション……とそれしか頭のないひとはもつとかつこわるい。

このふたつ、一見反対のこのように、じつは同じ態度を意味している。他人がそこにいないのだ。あるいは、他人にじぶんがどのように映っているかという、そういう想像力の働きの、欠けているのだ。

ひとにはそれぞれ印象というものがある。印象がいいというのは、ファッションでももちろんほめ言葉のひとつだ。清潔な感じがするとか、さっぱりしているとか、あるいはダサイとか、暗いとか、かつたるいだとか。

たとえば同じ医者でも、白衣のときにはどこことなくおつかない感じがするが、平服で往診に来ると、ふつと身近に感じて、なんでも相談できそうな感じがする。アゴウカな椅子に腰かけているときと、患者と同じクルクルまわる機能的な椅子に腰かけているときとは、安心感も違う。服装ひとつで印象はころつと変わってしまうのだ。

「印象」の反対の言葉をどこに存じだろうか。「表現」という言葉だ。英語で表すとそれがよくわかる。「印象」は英語でインプレッション。外界が心の内（イン）にインプレッションされる（プレス）ことを、インプレッション（印象）という。反対はエクスプレッション、つまり心の内を外（エクス）へと目に見える形で押し出す（プレス）こと、つまり「表現」を意味する。「印象」は内に刻みつけられたもの、「表現」は X のことなのだ。

さて、ファッションというと、最近、多くのひがこの「表現」に結びつけて考える。

- a 地味な^{かつこ}恰好をしていると、个性的ではない、もつと自己表現を、などといわれる。
- b まわりを見ても、若い女性はキャミソールのようなドレスとかスリッパドレスとか、インナーのようなミニドレスに身を包んでいる。
- c 個性の表現だとか自己表現というのがそれだ。
- d それに薄手のスケスケのカーディガンをちょいとはおって、という感じだ。
- e しかしよく見てみれば、流行に敏感なひとのかなりの部分というのは、じつは制服に身を包んでいるように、同じような非個人的な恰好をしている。

足元を見ても、たいていはかかどが太くて高いサンダルを履いている。

自己表現というときの自己が流行のなかでつくられるのだから、流行しか表現しようがないのだろう。しかも店で買う以上、「絶対的」に個性的な服などあるはずもないから、みんな似たり寄つたりの服装になるしかない。わたしもこのあいだ、買ってから半年も着る勇気がなかった。キバツな服のある会合に着ていったところ、そつくりの服装のひとと鉢合わせしてしまい、まったく居心地が悪い思いをした。

おしゃれというのは、じぶんを着飾るということではない。むしろそれを見るひとへの気くばり、思いやりだと考えると、服を選ぶときのセンスが変わってくる。つまり、他人の視線をデコレートするという発想をどこかに取り入れること、つまりそういうホスピタリティが、ファッションでいちばん大切な要素なのではないかと思う。

わたしは京都という街に生まれたので、子どものころからよく舞妓さんやお坊さんとすれ違った。どちらも服装がきわめて特異。簪かんざしからおこぼまで、いやというほど着飾る舞妓さんと、すりきれかけている貧相なきものにわらじのお坊さん。しゃなりしゃなりと夜の帳とばりのなかを歩く舞妓さんと、おーっとうなりながら早朝の街を托鉢たくはつをして歩く修行僧。徹底的にドレスアップして客を歓待するひとと、徹底的にドレスダウンして衆生を迎え入れるひと。どちらも常人の知らない幸福を教えるホスピタリティのプロ、どちらもけつしてじぶんのために着飾っているわけではない。A こういうセンスの働かせ方を、多くのひとが忘れかけているのではないだろうか。たとえば夏のかんかん照りの日に、白のきものに透けた黒の縞おろや紗しゃを重ね着して、見るひとの眼を涼ませるといった感覚を、である。

ファッションナブルということ、江戸のひとは「いき」と呼んだ。あか抜けして、張りがあって、色っぽいこと、いいかえると、諦めと意気地と媚態びたいが織りなす綾のこを、「いき」と呼んだ。その例を、九鬼周造という哲学者は『「いき」の構造』のなかで、うすものを身にまとった姿や、湯上がり姿、柳腰、細面おもてや流し目、抜き衣紋えもんや左袂ひだりしまの裾さばきなどに見いだした。さつきはちよつと嫌みをいつてしまったが、現代のキャミソール・ドレスは不思議に九鬼周造のあげている例に似ている。ただそこには、媚めびるばかりではない、映えとか張りともいうべき心の緊張がある点あが異なる。

地位がひとをつくるということとともに、服がひとをつくるということもよくいわれる。それは、ファッションがわたしたちのからだのイメージをわずかに、あるいはときに激しく揺さぶるものだからだ。

ファッションは品位とか優美といった情愛の肌理（き）をつくりだす。感情や気分とファッションは深く結びついている。力が抜け、洗練されていて、色があつて、コケツトなところもあつて、決まりすぎず、だからちよつと隙もある……といった心の揺れを微細に表現する。

ファッションはまた、社会からのあらゆる包囲をすり抜ける抵抗のスタイルを決める。背伸びやはずし、突っぱりや飽きっぽさというのは、ファッションのもつとも得意とする遊びであるが、こういうイメージの揺さぶりのなかで、ひとはそのつどじぶんというものを選び取ってゆくわけだ。

Y、それがファッションである。

寒くなると、わたしもおしゃれがしたくなる。夏の終わりにはそわそわだし、オフの日に街をぶらぶらして眼の（E）ジュンビ運動をしたり、行きつけの店に行つて、「どんなの入つてる？」とたずねたりする。

おしゃれがしたい、好きな服を着ていたいとは、だれもが思うことだ。しかし、どうして新しい服が欲しくなるんだろうと考えると、すぐには答えが浮かばない。

グズとか携帯電話とか化粧品は、ほかのみんなが持つていると欲しくなる。家やピアノもそうかもしれない。恋人もそうだろう。理由はかんたん。みんな持つてるからだ。あのひとも持つている、だからわたしも欲しい。

でも、みんな持つているというのは、逆にそれが欲しくない理由にもなりうる。同じ服装をしているひとに街ですれ違うのは、だれだつて気持ちよくない。あのひとも持つている、だからわたしは持ちたくない。

みんな持つているから欲しくなるし、みんな持つているから持ちたくなくなる。人間は、どうも一筋縄ではいかないものようだ。みんな持つていられるけれどみんなが持つていないものを探すというのが、ショッピングするときのわたしたちの方針だ。といつても、

難しく考えることはない。みんなとほぼ同じだけれども、ちよつとだけ色柄やテイストの違うものを選ぶということで、これはファッションではだれもがしていることだ。ことしスリットの入ったスカートがはやるとしたら、そしてみんなが左太腿（ふともも）の前に入れていたら、その位置をちよつとずらすとか、スリットをちよつと深くするとか……。

みんなとほとんど同じだけれどちよつとだけ違うのがいい——ファッションの真ん中にいるのはこういう集団であり、横並びというのがなにより嫌い、マジョリティからいつも一定距離をとっていたいから、みんながしているのとは違う未知のスタイルに手を出した

がる——というのが、先端のひとつだ。反対に、あるファッションが社会に完全に定着して「フツー」になるまで腰を上げないひとは、遅れすぎると逆に目立ってしまふので、遅れすぎないうちにこそこそつと腰を上げることになる。本当はこういうひとがいちばん流行に弱いだろう。いやいや、前世代のファッションを「ジジク」しようにも、店にはもうそういうものは並んでいないというだけのことかもしれない。

このように、みんなと同じじゃないと不安だけれど、みんなとまったく同じだともつと不安だ、そういうひとたちを核に、社会のなかの人間はゆつくりと集団移動していく。

同時に、こうして服というのは、まだ着られるのもう着られないものになる。服だけでなく、自動車でも歌でも、靴でも、機能的にはまだOKだけれど、ファッションとしてはアウトというのが、このモード社会の厳しいルールである。まだ着られるけれどももう着られない、そういうルールの外に出ることを、ひとはなぜ不安がるのだろうか。

それぞれのセルフ・イメージというものでともに支えあっているから、というのが、考えられるいちばん大きな理由だ。じぶんってどういう人間か、それに確信をもって答えることのできるひとなど、おそらく周囲にいないだろう。じぶんってつかみどころのないものだし、「じぶん、じぶん」っていうわりにはぼーっと思識が昼寝していることが多いし、おだてにもよくのるし、ささいなことに心がひっかかってじぶんの感情なのにうまくコントロールできないことがよくあるし、懲りているはずなのに同じ過ちを繰り返すもつまり、じぶんのことは、みんなほんとによくわからないのだ。だからなにが似合うかも他人にいつてもらわないとよくわからない。服を試着したとき、「これ、わたしに合うかしら」とまわりのだれかに問いかけないではいられないのも、そのためだ。

よく考えてみれば、そもそもじぶんのからだがよく見えない。じぶんの看板であるはずのじぶんの顔はじぶんではぜんぜん見えない。それを毎日他人にさらして生きているのだから、こんな無防備なことはない。誤解や曲解にさらされることもある。そこで、おたがいにより確かなセルフ・イメージをもてるように、たがいにイメージをあらかじめ微調整しあう。みんなおたがいを鏡にしてそこにじぶんを映すわけだ。セルフ・イメージを支えあうのである。ニーチェという哲学者は「Z」と書いたが、これこそわたしたちのファッションの根にある共通感情ではないだろうか。

(鷲田清一『てつがくを着て、まちを歩こう』より)

問1 カタカナで書かれた(ア)～(オ)の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア) ゴウカ

- ① カジヨウな投資を避ける。
- ② 大きなフカがかかる。
- ③ 金額のタカを問わない。
- ④ カビな装飾を施す。
- ⑤ 責任をテンカする。

(イ) コクイン

- ① ザンコクな所業を戒める。
- ② 弱点をコクフクした。
- ③ コクサイ社会で活躍する。
- ④ 病名をセンコクされた。
- ⑤ ジコクを問い合わせる。

(ウ) キバツ

- ① 学校のキソクを守る。
- ② キチの事実だ。
- ③ キトクな性格の持ち主だ。
- ④ キカイをうまく捉えて成功した。
- ⑤ キカイ体操の選手になる。

(エ) ジュンビ

- ① 食料のビチクが足りない。
- ② ビミヨウな色彩を表現する。
- ③ シュウビを開く。
- ④ ビボウを誇る。
- ⑤ マツビに記す。

(オ) ジソク

- ① 彼のジマンの息子だ。
- ② 車に乗っていてジコに遭う。
- ③ 従来の方針をケンジする。
- ④ 会長に就任することをコジする。
- ⑤ 権力をコジする。

問2 空欄 に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 外界を意識した目立つもの
- ② 外に押し出されたもの
- ③ 独自の個性を外に示すもの
- ④ 自分の主張を外在化したもの
- ⑤ 印象によって外に表れたもの

問3 本文 の中のa～eの文を意味の通るように並べたものとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

- ① a | e | c | b | d
- ② a | e | b | d | c
- ③ c | a | e | b | d
- ④ e | d | c | b | a
- ⑤ c | b | e | d | a

問4 傍線部A「こういうセンスの働かせ方」の説明として適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 23

- ① 自分が着飾る際に他人の意見も取り入れること。
- ② その場その場にあわせたファッションを心がけること。
- ③ 流行を追わず、自分のセンスを信じて着飾ること。
- ④ 自分の地位に合わせてどのような服を着るべきかを考えること。
- ⑤ 見る人への気配りや思いやりとして着飾ること。

問5 空欄 Y に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 24

- ① モード界のルールにとりあえず従っておこうという行為。
- ② 他人の評価を前提に明確な自己像に到達しようとする行為
- ③ 同じ誤ちを繰り返さないよう他人の評価の方をあてにした行為
- ④ じぶんをいつも可変的な状態に置いておく行為
- ⑤ 周りの人間以上に自分のことを理解するための創造行為

問6 傍線部B「人間は、どうも一筋縄ではいかないものようだ」と述べる理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 25

- ① みんながもっているけどみんながもっていないものを探そうとするから。
- ② どうしてものがほしくなるのかと考えても、答えが浮かばないから。
- ③ 誰もが持っているものは自分も持っていたいと思うものだから。
- ④ 同じ服装をしている人と出会うと気持ちがよくなくなるから。
- ⑤ ものが欲しくなる理由が欲しくない理由にもなりうるから。

問7 傍線部C「まだ着られるけれどももう着られない、そういうルールの外に出ることを、ひとはなぜ不安がるのだろうか」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 26

- ① 機能的には大丈夫だが、ファッションとしては駄目というモード社会の厳しいルールが存在しているから。
- ② 誰もがそれぞれのセルフ・イメージで互いを支えあっているに過ぎず、自分のことを本当の意味でわかっているものなどないから。
- ③ みんなと同じでないと不安だが、全く同じだともっと不安だという人が社会の中核をなしているから。
- ④ モード界の厳しいルールの外に出してしまうと、誰からも相手にされなくなってしまう、セルフ・イメージを形成する事さえできなくなるから。
- ⑤ 自分の感情を支配することは誰にも難しく、社会的に認められているファッションのルールに従っていればひとまずは安心できるから。

問8 空欄

Z

 に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

27

- ① 他人を通して得られた自己像は、どこまでも虚偽のものである
- ② 人間とは、お互いに誤解しあっている動物に過ぎない
- ③ 各人にとってはじぶん自身をもっとも遠い者である
- ④ 人は見かけによつてのみ、その人がどのような人間なのかを理解できる
- ⑤ 人間は主体的に物事の真理を判断しなくてはならない

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

28

- ① ファッションに気がいかない人もファッションしか頭がない人もかつこが悪いのは、どちらも結局は他人の目を気にしているという点で同じだからである。
- ② 服装一つで印象はがらりとかわるものであり、それゆえ医者などに安心感を与える必要がある人は、患者さんが身近に感じられる印象を与えるべきである。
- ③ 自己表現と言う場合の自己は流行の中で作られるものなので、自分と同じ服を着た人と会ってしまうなど、本当の自己をファッションによつて表現することはできない。
- ④ ファッションの先端をいく人は、人とは違うものに手を出す、その反対の人は、人と違って目立ってしまったわなないように流るのファッションに手を出す。
- ⑤ 他人に媚びるばかりではなく、映えとか張りともいえる心の緊張がある点で、現代のキャミソール・ドレスは九鬼周造が「いき」としてあげている例に似ている。

